

中学生における学校ストレスと自己価値の 相互作用についての縦断的研究

西野 泰代¹⁾

問題と目的

心理社会的ストレスが、青年期における情緒的な問題や行動上の問題を引き起こす危険要因となることは、いくつもの研究により報告されてきた (Cohen, Kessler, & Gordon, 1995; Compas, 1987; Jackson & Warren, 2000; Johnson, 1986)。その一方で、危険要因にさらされながら、問題を起こすことなく、健全な発達を遂げる子どもたちがいることも明らかにされ、危険要因の存在が必ずしもネガティブな結果を生み出すわけではないことが示された (Garmezy, 1985; Masten, 2001; Werner & Smith, 1992)。こうして、研究者たちは、問題行動の生起を促進するような要因が存在する一方で、子どもたちを健全な発達へと導く要因 (保護要因) が存在することに注目した (Kumpfer, 1999; Luthar, 1991; Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000)。そのような保護要因のうちのひとつとして自己価値がある (Garmezy, 1985; Masten & Garmezy, 1985)。本研究は、中学生における心理社会的ストレスと自己価値との関係に注目し、これを検討するものである。

Harter (1990) は、「ポジティブな自己価値を持つことが、ストレスに対する緩衝要因として働きうる」ことを示唆し、Rutter (1990) は、「人生における様々な出来事を上手く乗り切ってゆける自信や、ひとりの人間としての自分の価値をきちんと自分で認識できていることが、ストレスから身を守る要因である」ことを示した。また、White (1987) は、「成功するためには強固な自己確信が必要であり、楽観的な自己評価が、困難な状況におけるストレス反応を減じる」ことを示唆した。このように、ストレスに対する緩衝要因としての自己価値が検討される一方で、Cohen, Burt, & Bjorck (1987) は、ネガティブな出来事が自己価値に対する有意な予測要因であることを示した。こうしてみると、ストレスと自己価値の関係について、お互いに影響を及ぼしあう相補的

な関係が想定されうる。社会的な状況と個人の特性の間での影響を及ぼす方向について明らかにすることは、ライフコースの発達に関する研究にとって重要な関心事である (Caspi, 1998) とされるが、ストレスと自己価値の関係については、それぞれ1方向の関係性について横断データを用いて検討されたものが多く、双方向の因果関係について実証的に検討した研究はほとんど見られない。そこで、本研究は、縦断データを用いて、まず、子どもたちの心理社会的ストレスが自己価値の変化をどの程度予測するかについて検討し、次に、子どもたちの心理社会的ストレスと自己価値の相補的な関係について検討することを目的とする。

Cohen et al. (1987) は、312名の7・8年生を対象として、ライフイベントと心理的機能との関連について、2時点での縦断データを用いて検討した結果、ネガティブライフイベントは自己価値を有意に予測し、また、自己価値の低さが、その後のコントロール可能なネガティブライフイベントを有意に予測することを示唆した。しかしながら、2時点での比較は、変化した結果を示すことができても、変化のプロセスを示すことはできない。

Leary, Tambor, Terdal, & Downs (1995) は、主観的な自己価値が、自分に対する他者の反応を効果的にチェックする尺度であることを示唆し、特に、拒絶されたり、排除されることに敏感に反応することを示した。また、他者による受容は、自己価値の維持にとって重要であるとする研究もいくつか見られる (Eskilson, Wiley, Meuhlhauer, & Dodder, 1986; Harter, 1993)。一方、Rutter (1990) は、自己価値を促進するには、安全で調和のとれた愛情関係や自分にとって関心のあることを上手くやり遂げることを経験することが大きな影響力を持つことを示唆した。同様に、Harter & Marold (1991) は、「子どもの自己価値は、自分が重要と考えている領域で成功したり、あるいは、自分にとって大切な人々からの支持や賞賛などを得ることによって高まっていくが、逆に、失敗したり、それらが得られないときには低下していく」ことを示した。こうしてみると、子どもたちに

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

とって重要な領域や対人関係でのストレスが、自己価値を有意に予測することが想定できる。

児童期後半から青年期初期にかけて、子どもたちは社会的環境の中で活発に相互作用し、自分たちの社会的世界を選択し、創り上げてゆくため、対人関係上のストレスを経験する機会がより頻繁になってくる (Scarr, 1992)。特に、学校での「友人関係」は、子どもたちの適応にとって大きな意味を持ち、先行研究においても、学校での「友人関係」が様々なストレス反応に影響を与えていることが示された (岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992; 嶋田, 1998b)。また、「学業」に関するストレスも多くの子どもたちによって経験されていることが明らかにされている (岡安ほか, 1992)。さらに、この時期の子どもたちにとって、対人関係上の出来事や達成しなくてはならないことは、男女で異なることを示した研究がいくつかある (Cross & Madson, 1997; Gore, Aseltine, & Colten, 1993; Rose, 2002; Rose & Rudolph, 2006)。そうであれば、子どもたちにとって重要な領域や対人関係でのストレス認知と自己価値との関係は、男女で異なる可能性がある。

以上のことから、本研究では、中学生を対象とし、学業と友人関係におけるストレスに焦点を当て、3時点での縦断データを用いて、ストレスと自己価値の関係について次の3点を検討する。

- 1) 子どもたちの認知するストレスが、子どもたちの自己価値の変化をどの程度予測するかについて検討する。
- 2) 子どもたちの認知するストレスと自己価値の相補的な関係について検討する。
- 3) 子どもたちの認知するストレスと自己価値との関係は、男女で異なるかどうかを検討する。

方 法

調査対象および調査時期 A県内にある国立大学附属中学校1-3年生237名 (1年生男子39名, 女子40名, 2年生男子40名, 女子40名, 3年生男子38名, 女子39名)を対象に、2006年6月 (T1)、2006年11月 (T2)、2007年3月 (T3) の3回にわたり、クラスごとの一斉法により質問紙調査を実施した。分析対象者は、3回の調査全てに回答し、回答に不備や欠損の無かった者205名 (1年生男子35名, 女子38名, 2年生男子34名, 女子38名, 3年生男子31名, 女子29名)であった。

調査内容 以下の2つの尺度を使用した。

(1) 学校ストレス 岡安・嶋田・坂野 (1993) によって作成された中学生用学校ストレス尺度の4つの下位尺度 (学業・友人関係・先生との関係・部活動)

から、本研究では、「学業」と「友人関係」の2つのカテゴリーを取り上げた。この2つのカテゴリーは、三浦・坂野 (1996)、岡田 (2002) においても中学生の代表的な学校ストレスとして使用されているが、本研究では、岡田 (2002) で分析に使用された10項目 (学業5項目:「思っているほど成績が伸びないことがあった」「人ができた問題ができないことがあった」「先生や両親から期待されているような成績がとれなかった」など; 友人関係5項目:「友だちからいやみや悪口を言われたり、かげぐちを言われたりしたことがあった」「友だちにきついものの言い方をされたことがあった」「友だちからかわれたり、ばかにされたりしたことがあった」など)を用いた。各項目に記された出来事について、最近経験したかどうか (経験の有無)を2件法で回答させ、経験したと答えた場合には、その出来事を経験したことがどの程度いやだったか (経験の評価)について、4段階 (0:全然いやでなかった-3:非常にいやだった)で回答させた。ストレス評価得点の算出方法は、各項目を経験した場合には経験評価の値を得点とし、経験しなかった場合には0点とした (得点範囲は0点-3点)。

(2) 自己価値 Self-Perception Profile for Adolescents (SPPA) (Harter, 1988) の尺度を基に Kosawa, Azuma, Kashiwagi, Suzuki, Shimizu, Gjerde, & Cooper (1996) で使用された日本語版38項目のうち、自己価値 (Self-worth) 5項目を用いた。各質問項目は、ある事柄に対して2つのタイプ [肯定的対否定的] に分かれ、自分がどちらのタイプかを選択し、そのタイプに関して「よくあてはまる」か「だいたいあてはまる」かのいずれかを選択する (例:「自分の生活や生き方が好きでない。または、自分の生活や生き方が好きだ。」「自分らしさが好きだ。または、しばしば別人だったらと思う。」など)。たとえば、ある事柄に対して肯定的なタイプがよくあてはまれば4点、肯定的なタイプがだいたいあてはまれば3点、否定的なタイプがだいたいあてはまれば2点、否定的なタイプがよくあてはまれば1点という点数化に基づく4件法で評定が求められた。

結 果

基本統計量 各調査時期における尺度の平均値および標準偏差と尺度間の相関係数を Table 1 に示した。まず、T1での学校ストレス10項目について探索的因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を実施し、その因子構造を検討した。その結果、原本 (岡安ほか, 1993) と同じ因子構造が確認され、また、信頼性係数 (クロンバックの α) を求めたところそれぞれに内的整合性も認められたので、あらためて学校ストレスの2因子を「学

Table 1 各尺度の平均値及び標準偏差と尺度間相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	M	SD
①学業ストレス (T1)									6.08	3.56
②学業ストレス (T2)	0.65***								6.89	3.75
③学業ストレス (T3)	0.58***	0.72***							6.89	3.89
④友人関係ストレス (T1)	0.31***	0.29***	0.31***						5.63	4.12
⑤友人関係ストレス (T2)	0.28***	0.46***	0.42***	0.48***					6.13	4.33
⑥友人関係ストレス (T3)	0.34***	0.34***	0.48***	0.44***	0.59***				5.51	4.30
⑦自己価値 (T1)	-0.29***	-0.28***	-0.30***	-0.21**	-0.18*	-0.26***			11.93	3.67
⑧自己価値 (T2)	-0.23**	-0.33***	-0.32***	-0.21**	-0.23**	-0.32***	0.76***		12.01	3.75
⑨自己価値 (T3)	-0.29***	-0.36***	-0.39***	-0.17*	-0.25**	-0.30***	0.65***	0.75***	11.89	3.80

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 2 多母集団分析による各モデルの適合度指標

ストレス	モデル1		モデル2	
	学業	友人関係	学業	友人関係
CFI	0.99	0.97	0.99	0.97
RMSEA	0.05	0.06	0.05	0.07
AIC	96.69	99.50	101.74	107.53
BCC	102.92	105.56	109.01	114.46
χ^2	24.69	29.50	17.74	27.53
自由度	18	19	12	14

業 (5項目: $\alpha=.67$) 「友人関係 (5項目: $\alpha=.74$)」と名づけ、各因子に含まれる項目の得点を合計したものをそれぞれの因子尺度得点とした。T1での自己価値5項目について、信頼性係数を求めたところ.85であり、十分に内的整合性があると認められたので、この5項目それぞれの得点を加算して自己価値尺度得点とした。同様にして、T2, T3における各尺度の信頼性係数を求めたところ.71-.87であった。

各尺度間の関係について、学校ストレスの「学業」「友人関係」はいずれも自己価値とは有意な負の相関関係にあった。

クロスラグモデルを用いた多母集団の同時分析 子どもたちの認知するストレスと自己価値の関係が、時間的経過の中でどのように変化するのかについて検討するために、3時点 (T1, T2, T3) でのクロスラグモデルを用いた共分散構造分析を実施することにした。分析するにあたり、このモデルに性差があるかどうかを確認するため、まず、その規定要因の強さが性によって差がないとするモデル (モデル1) と差があるモデル (モデル2) を設定した。モデル1には各パラメータに等値制約を課し、モデル2には等値制約を課さなかった。学業ストレスと友人関係ストレスを別にして、それぞれ

モデル1、モデル2を多母集団の同時分析により比較した結果 (Table 2)、AIC (Akaike Information Criterion)、BCC (Browne-Cudeck Criterion) の値から、学業ストレスと自己価値の関係でモデル1、友人関係ストレスと自己価値の関係でもモデル1の方がデータに対する当てはまりの良いことが示された。また、CFI (Comparative Fit Index)、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) の値から、それぞれ適合度¹⁾が高いことも確認され、本研究で検討したプロセスモデルでは、

1) 本研究で用いた適合度指標であるが、GFI (Goodness of Fit Index)、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index) は、観測変数が30程度を超えるモデルや平均構造モデル、多母集団モデルでは参考に出来ないとされている (服部, 2002) ことを考慮し、AIC, BCC, CFI, RMSEAの値からモデルのあてはまりの良さを検討した。CFIは1に近いほど適合が良いことを示し、0.90-0.95以上がモデル採択の基準となる。RMSEAは値が小さいほど適合が良いことを示し、0.05以下であればあてはまりが良いと判断される。AIC, BCCの値に絶対的な意味はなく、モデル比較に際し、AIC, BCCの値が小さいモデルほど優れていると判断する (狩野・三浦, 2002)。

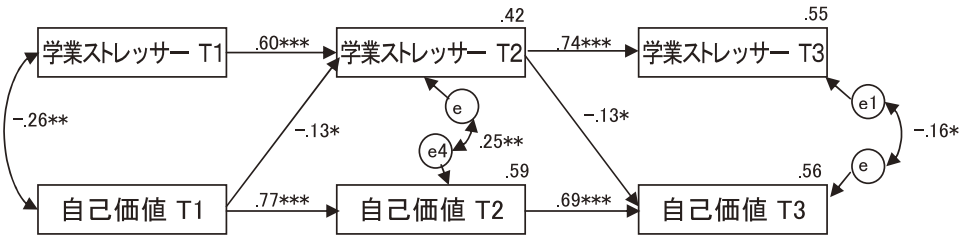


Figure 1 学業ストレスと自己価値の関係についての共分散構造分析結果 (注). 有意なパスのみ表示, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

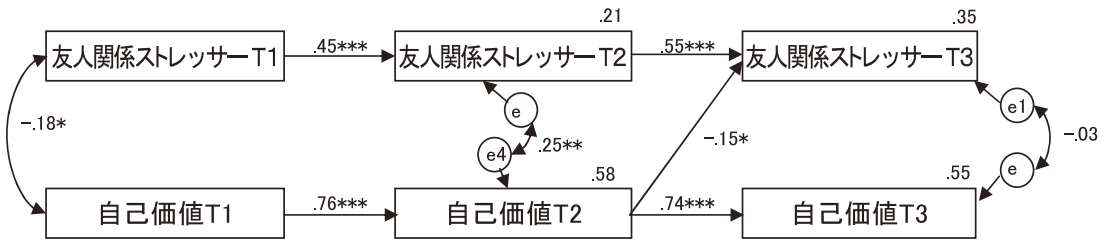


Figure 2 友人関係ストレスと自己価値の関係についての共分散構造分析結果 (注). 有意なパスのみ表示, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

学業ストレスと友人関係ストレスどちらも、自己価値との関係において、性による有意な差が見られないことが明らかになった。そこで、以下の分析においては、男女を同一集団として扱った。

学校ストレスと自己価値との関係についての共分散構造分析 Figure 1, 2は、それぞれ学業ストレスと自己価値、友人関係ストレスと自己価値の関係についての共分散構造分析の結果であり、片方矢印の上に表示された数値は標準化された因果係数を示し、変数の右肩に表示された数値は本モデルで説明される変数の変動の割合 (R^2 : 決定係数にあたる) を示す。Figure 1に示された学業ストレスと自己価値の関係について、T1の自己価値は、T2の学業ストレスを有意に予測し ($\beta = -.13, p < .05$)、T2の学業ストレスはT3の自己価値を有意に予測し ($\beta = -.13, p < .05$)、学業ストレスと自己価値の間には相補的な関係が見られることが示された。すなわち、自己価値の高さが学業ストレスを軽減する一方で、学業ストレスが自己価値を低下させる一因となりうることを示唆された。Figure 2に示された友人関係ストレスと自己価値の関係について、T2の自己価値はT3の友人関係ストレスを有意に予測した ($\beta = -.15, p < .05$) が、自己価値と友人関係ストレスの間に相補的な関係は見られなかった。すなわち、自己価値の高さが友人関係ストレスを軽減する可能性は示されたが、友人関係ストレスによる自己価値の有意な低下

は確認されなかった。

考察

本研究では、中学生を対象とし、3時点での縦断データを用いて、中学生の発達にとって重要な意味を持つ「学業」と「友人関係」におけるストレスに焦点を当て、ストレスと自己価値の関係について検討した。以下において、その結果について考察する。

学校ストレスと自己価値の関係における性差 子どもたちが学校において経験する様々なストレスのうち、本研究で取りあげた「学業」「友人関係」の各ストレスと自己価値の関係において、本研究では性差を確認することができなかった。先行研究において、三浦・福田・坂野 (1995)、岡安・嶋田・丹羽ほか (1992) では、学業ストレスに対する認知についての性差が確認されており、また、友人関係ストレスの中でも深刻度の高い「いじめ」についても性差が示されている (坂西, 1995; 岡安・高山, 2000)。自己価値についても性差は確認されており (Harter, 1990)、個々の要因についての性差は明らかにされている。しかしながら、本研究で検討した、学業ストレスと自己価値、友人関係ストレスと自己価値という両者間の関係に個々の要因の性差は反映されなかった。この点について、ストレス認知と他の要因との関連を扱った研究を概観してみると、ライフイベントと心理的機能との関連について検討した

Cohen et al. (1987) においても、ストレスフルなライフイベントの認知と青年期の問題行動 (internalizing と externalizing の双方) との相補的な関係について検討した Kim, Conger, Elder, & Lorenz (2003) においても、本研究の結果同様、モデルにおける性差は認められなかった。そうしてみると、性差に関する本研究の結果は、先行研究の知見に沿ったものであり、学業ストレス、友人関係ストレスそれぞれと自己価値との関係における性差はないであろうと考えられる。

学校ストレスが予測する自己価値 本研究の結果から、学校ストレスのなかでも「学業」ストレスが自己価値を有意に予測することが示された。神藤 (1998) は、学業ストレスが、「不機嫌・怒り」「抑うつ・不安」「無気力」「身体」といったストレス反応を高めることを確認し、長尾 (2002) は、中学生にとって学業成績の低下が大きなストレスになることを示した。海外においても、過去の学業達成場面等における失敗経験が学校ストレスを生み出す大きな原因となっていることが、いくつかの研究において明らかにされており (Marlett & Watson, 1968; Finch, Kendall, Montgomery & Morris, 1975)、失敗経験によるテスト不安水準と子どもたちの有能感や自己価値を減少させる失敗経験との関連性を指摘する研究もある (Covington, Omelich, & Schwarzer, 1986)。本研究で示された結果は、これら先行研究の知見を統合し、ストレス反応プロセスを解明するための一助となるかもしれない。すなわち、「人ができた問題ができないことがあった」「先生や両親から期待されているような成績がとれなかった」などの (失敗) 経験をすることが、自己価値を低下させることが明らかにされたことで、ストレス反応低減への介入やストレス耐性育成への有効な示唆となりうるであろう。

「友人関係」ストレスは、自己価値を有意に予測せず、「友だちからいやみや悪口を言われたり、かげぐちを言われたりしたことがあった」「友だちにからかわれたり、ばかにされたりしたことがあった」といった経験は、自己価値の低下を招くには至らないことが本研究のデータから示された。松井 (1996) は、「現代の青年は、気疲れしないように付き合い……一定の距離をおいた友人関係を営んでいる」と指摘し、鶴養 (2004) は、子どもたちが「自分を素直に出すことを恐れ、嫌われないように気を遣った友だち関係に終始する」ことを憂いたが、本研究の被調査者となった子どもたちの友人関係ストレス得点は、3時点いずれにおいても低く、子どもたちの間では、お互いに嫌な思いをさせないという、気を遣いあう関係が成り立っているのかもしれない。しかしながら、今回の調査は、1学年2クラスという小規模校が

対象であったため、この結果を一般化することは難しいかもしれない。松尾 (2000) は、中学1-3年生640名を対象とした調査により、友人ストレスと自己価値との間に有意な負の相関を確認しており、この点については、更なる検討が必要であろう。

学校ストレスと自己価値の相互作用 本研究の結果から、学業ストレスと自己価値の間に相互作用の関係が認められた。すなわち、自己価値の高さが学業ストレスを軽減する一方で、学業ストレスが自己価値を低下させる一因となりうることが示唆された。友人関係ストレスと自己価値の間に相互作用は確認されず、自己価値の高さが友人関係ストレスを低減する一方向の関係が示された。これにより、学校ストレスを軽減するために、自己価値を確立し維持することの必要性が確認されたが、一方で、学校ストレス低減のための介入は、ストレスの種類によって異なる多様な視点で行われるべきであろうし、また、ストレス耐性としての自己価値が学業ストレスに対しては万能でない可能性も示唆されたといえよう。

末廣 (1996) は、「受験戦争に勝利することが最終目標になったかのような風潮」が、子どもたちに常に緊張感を強めている現状を指摘し、嶋田 (1998a) は、「まじめな良い子ほどいつも学業の影響性を高く評価する傾向にあることから、ストレスが高くなる」ことを示唆した。また、星野 (1990) は、学校における「学業成績の重視」という、子どもに対する評価尺度の一元化が、今日の社会の非常に大きな非行原因のひとつとなっていることを示唆した。このように多くの子どもたちが学業ストレスの脅威に晒されている現状にあって、ストレス軽減効果の期待される自己価値もまた学業ストレスの影響を被る可能性があるとするれば、自己価値を確立し維持するために適切な介入が望まれるところである。

引用文献

- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- Caspi, A. (1998). Personality development across the life course. In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology Vol.3*. New York: Wiley, pp. 311-388.
- Cohen, L.H., Burt, C.E., & Bjorck, J.P. (1987). Life stress and adjustment: Effects of life events experienced by young adolescents and their parents. *Developmental Psychology*, 23, 583-592.
- Cohen, S., Kessler, R.D., & Gordon, L.U. (1995). *Strate-*

- gies for measuring stress in studies of psychiatric and physical disorders. In S. Cohen, R.D. Kessler, & L.U. Gordon (Eds.), *Measuring stress: A guide for health and social scientists*. New York: Oxford University Press, pp. 3-28.
- Compas, B.E. (1987). Stress and life events during childhood and adolescence. *Clinical Psychology Review*, 7, 275-302.
- Covington, M.V., Omelich, C.L., & Schwarzer, R. (1986). Anxiety, aspirations and self-concept in the achievement process: A longitudinal model with latent variables. *Motivation and Emotion*, 10, 71-88.
- Cross, S.E., & Madson, L. (1997). Models of the self: Self-construals and gender. *Psychological Bulletin*, 122, 5-37.
- Eskilson, A., Wiley, M.G., Meuhlauer, G., & Dodder, L. (1986). Parental pressure, self-esteem and adolescent reported deviance: Bending the twig too far. *Adolescence*, 21, 501-515.
- Finch, A.J., Kendall, P.C., Montgomery, L.E., & Morris, T. (1975). Effects of two types of failure on anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, 84, 583-585.
- Garnezy, N. (1985). Stress resistant children : The search for protective factors. In J. Stevenson (Ed.), *Recent research in developmental psychopathology. Journal of Child Psychology and Psychiatry Book Supplement No.4*. Oxford, England: Pergamon Press, pp.213-233.
- Gore, S., Aseltine, R.H., & Colten, M.E. (1993). Gender, social-relational involvement and depression. *Journal of Research on Adolescents*, 3, 101-125.
- Harter, S. (1988). *Manual for the self-perception profile for adolescents*. University of Denver.
- Harter, S. (1990). Self and identity development. In: S.Feldman & G.Elliot (Eds.) *At the threshold : The developing adolescent*. Cambridge, MA : Harvard University Press, pp.352-387.
- Harter, S. (1993). Causes and consequences of low self-esteem in children and adolescents. In R.F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem: The puzzle of low self-regard*. New York: Plenum, pp. 87-116.
- Harter, S., & Marold, D.B. (1991). A model of the determinants and mediational role of self-worth: Implications for adolescent depression and suicidal ideation. In G.Goethals & J.Strauss (Eds.), *The self: An interdisciplinary approach*. New York : Springer-Verlag.
- 服部 環 (2002). 仮説をモデル化し検討する一構造方程式モデリング— 渡部 洋 (編), *心理統計の技法* 東京 : 福村出版, pp.151-166.
- 星野周弘 (1990). 非行の原因と非行防止活動 総務庁青少年対策本部 (監修). 青少年非行問題研究会 (編). 青少年の非行問題 — 斯界の専門家による提言にみる— 東京 : ぎょうせい, pp.225-254.
- Jackson, Y., & Warren, J.S. (2000). Appraisal, social support, and life events: Predicting outcome behavior in school-age children. *Child Development*, 71, 1441-1457.
- Johnson, J. (1986). *Life events as stressors in childhood and adolescence*. Beverly Hills, CA: Sage.
- 狩野裕・三浦麻子 (2002). *グラフィカル多変量解析 — 目で見える共分散構造分析— (増補版)*. 京都 : 現代数学社.
- Kim, K.J., Conger, R.D., Elder Jr., G.H., & Lorenz, F.O. (2003). Reciprocal influences between stressful life events and adolescent internalizing and externalizing problems. *Child Development*, 74, 127-143.
- Kosawa, Y., Azuma, H., Kashiwagi, K., Suzuki, O., Shimizu, H., Gjerde, P., & Cooper, C. (1996). Japan-U. S. study on self development and socio-cultural context in adolescence —Perceived psychological support and self-competence—. *Science Reports of Tokyo Women's Christian University*, 1431-1440.
- Kumpfer, K.L. (1999). Factors and processes contributing to resilience: The resilience framework. In M.D. Glantz & J.L. Johnson (Eds.), *Resiliency and development: Positive life adaptations*. New York: Kluwer Academic, pp. 179-224.
- Leary, M.R., & Downs, D.L. (1995). Interpersonal functions of the self-esteem motive: The self-esteem system as a sociometer. In M. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum.
- Leary, M.R., Tambor, E., Terdal, S., & Downs, D.L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Luthar, S.S. (1991). Vulnerability and resiliency: A study of high risk adolescents. *Child Development*, 62, 600-616.
- Luthar, S.S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000). The construct of resilience: A critical evaluation and guide-

- lines for future work. *Child Development*, 71, 543-562.
- Marlett, N.J., & Watson, D. (1968). Test anxiety and immediate or delayed feedback in a test-like avoidance task. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 200-203.
- Masten, A.S. (2001). Ordinary magic: Resilience processes in development. *American Psychologist*, 56, 227-238.
- Masten, A.S., & Garmezy, N. (1985). Risk, vulnerability, and protective factors in developmental psychopathology. In B.B. Lahey & A.E. Kazdin (Eds.), *Advances in clinical child psychology Vol. 8*. New York: Plenum Press, pp. 1-52.
- 松井 豊 (1996). 親離れから異性ととの親密な関係の成立まで 斎藤誠一 (編). 青年期の人間関係, 人間関係の発達心理学 4 東京: 培風館, pp.19-54.
- 松尾直博 (2000). 中学生の対人関係と自己価値・他者価値. 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 348.
- 三浦正江・福田美奈子・坂野雄二 (1995). 中学生の学校ストレスとストレス反応の継時的変化 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 555.
- 三浦正江・坂野雄二 (1996). 中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研究, 44, 368-378.
- 長尾 博 (2002). 青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程 発達心理学研究, 13, 295-306.
- 岡田佳子 (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての検討— 教育心理学研究, 50, 193-203.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレス評価とストレス反応との関連 心理学研究, 63, 310-318.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生の学校ストレスの測定法に関する一考察 ストレス科学研究, 8, 13-23.
- 岡安孝弘・高山巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Rose, A.J. (2002). Co-rumination in the friendships of boys and girls. *Child Development*, 73, 1830-1843.
- Rose, A.J., & Rudolph, K.D. (2006). A review of sex differences in peer relationship processes: Potential tradeoffs for the emotional and behavioral development of girls and boys. *Psychological Bulletin*, 132, 98-131.
- Rutter, M. (1990). Psychosocial resilience and protective mechanisms. In J. Rolf, A.S. Masten, D. Cicchetti, K.H. Nuechterlein & S. Weintraub (Eds.), *Risk and protective factors in the development of psychopathology*. Cambridge University Press, pp.181-214.
- Scarr, S. (1992). Developmental theory for the 1990's: Development and individual differences. *Child Development*, 63, 1-19.
- 嶋田洋徳 (1998a). 子どもが受ける学校ストレス・家庭ストレス 児童心理, 14-22. 東京: 金子書房
- 嶋田洋徳 (1998b). 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 東京: 風間書房
- 神藤貴昭 (1998). 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響 教育心理学研究, 46, 442-451.
- 末廣晃二 (1996). 勉強のストレスを和らげる (pp.47-52) 児童心理.
- 鶴養啓子 (2004). いま, 思春期の友だち関係はどうなっているか 児童心理, pp.1-9. 東京: 金子書房
- Werner, E., & Smith, R. (1992). *Overcoming the odds: High risk children from birth to adulthood*. Ithaca, NY: Cornell University.
- White, R.W. (1987). Seeking the shape of personality: A memoir. Marlborough, NH: Homestead Press.

(2007年9月28日受稿)

ABSTRACT

The Longitudinal Study: Reciprocal Influences between School Stress
and Self-worth among Junior High School Students

Yasuyo NISHINO

The purpose of this study was to investigate the reciprocal influences between school stressors and self-worth among junior high school students. A sample of 237 junior high school students participated in a questionnaire survey three times. SEM using cross-lag model was conducted. The data indicated that self-worth at Time 1 was the predictor of “study” stressors at Time 2, and that “study” stressors at Time 2 was the predictor of self-worth at Time 3. The data also indicated that self-worth at Time 2 was the predictor of “friend” stressors at Time 3. “Friend” stressors, however, didn't significantly predict self-worth. In addition, multi-sample analysis revealed no gender difference in this model. As a result, self-worth might moderate the influence of both “study” stressors and “friend” stressors. Self-worth and “study” stressors would be related reciprocally, but self-worth and “friend” stressors wouldn't be related reciprocally. The results of present study provided a reminder of the bidirectional nature of relations between self-worth and “study” stressors.

Key words: self-worth, school stressors, moderation effect, reciprocal influences,
junior high school students